HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	トレルチの「脱歴史化」モチーフの射程 ： 塩濱健児氏の博士論文に寄せて
著者	小柳，敦史; KOYANAGI，Atsushi
引用	年報新人文学(15)：136-157
発行日	2018-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

◉研究ノート

トレルチの「脱歴史化」モチーフの射程

―塩濱健児氏の博士論文に寄せて―

小柳　敦史

1. はじめに

北海学園大学大学院文学研究科英米文化専攻において、ドイツの神学者であり哲学者でもあったエルンスト・トレルチの思想研究に従事してきた塩濱健児氏に、２０１８年３月、博士学位が授与された。審査対象となった論文は、「「歴史を歴史によって克服する」――エルンスト・トレルチの《歴史主義》についての考察――」(1)である。文学研究科英米文化学科の一員として、本学科から初めての博士学位取得者が誕生したことを祝福すると同時に、塩濱氏と同じくトレルチという思想家を主たる研究対象とする者として、トレルチ研究に新たな刺激が与えられたことを喜びたい。英米文化学科の一員として、と書いたが、私が北海学園大学に着任したのは２０１７年４月であり、また、当時は大学院の担当ではなかったため、塩濱氏の研究指導にも、学位審査にも携わっていない。そこで、『新人文学』の紙面を借り、「研究ノート」として塩濱氏の論文との対話を行いたい。

本稿は、基本的には塩濱氏の博士論文の記述を辿りながら、適宜コメントを加える形で進んで行く。なお、その中には批判的なコメントもあるが、それは、塩濱氏の論文は真摯に学問的な対話をすべき対象であるという敬意と、この対話を足がかりとして私たちそれぞれの研究をさらに進めていきたい、そして願わくば、これからのトレルチ研究を共に牽引していきたいという願いの現れであることをご理解いただきたい。また、学問的な対話という文章の性質に鑑み、以下では敬称を省略する。

2. 研究課題について

まず序章で本論文の研究課題が提示される。塩濱が本論文で目指したことは第一に、「時期的にはトレルチの初期から晩年に至るまでの全体を文脈として、《歴史主義》とは何であるのかを彼の思想に内在的に解明すること」にある。この目標は、非常に野心的なものである。トレルチはそれほど長命であったわけではないが(2)、かなりの量のテキストを遺しており、その全体像を捉えることがそもそも容易なことではない。また、トレルチという思想家は、我が国ではそれほど知名度が高いとは言えないが、トレルチの母国であるドイツを中心に1980年代以降、いわゆる「トレルチ・ルネサンス」が起き、その思想に対する関心が高まった。それ以降は研究が細分化され、一人の研究者が一冊の著書や博士論文でトレルチ思想の全体を視野に入れることはさらに困難になっている。その結果として、もっぱら特定の時期や個別のテーマに関心を絞った研究成果が生み出されているのが現状である。塩濱の博士論文も一見したところテーマを絞っているように見えるかもしれないが、《歴史主義》とはトレルチが論じた様々なテーマの一つというものではなく、トレルチ思想を貫く中心的な主題

であることは衆目の一致するところであり、当然ながら塩濱もそのことに自覚的である。つまり、本論文はトレルチ思想の中心的な主題を、トレルチの思想家としてのキャリアのかなりの時期を範囲として論じることを目指している。それでは、このような目標設定は大それた蛮勇でしかないのかと問われれば、私としてはそうではないと答えたい。日本を代表するトレルチ研究者である近藤勝彦が20年前に危惧していたように(3)、手稿などを含めた一次文献を元に詳細な歴史的研究をドイツの研究者と同水準で進めることは、地理的・資料的制約のある日本人研究者には難しい—もちろん、この制約を乗り越えようとする努力を否定するわけでも、この制約を自明視する諦念を肯定するわけでもないが—。そのような研究状況にあって、日本でトレルチ研究に従事するものが取り組むべき課題は、ドイツで蓄積されている個別的な歴史研究を参照し、その成果の意義を受け止めつつも、それら個別のテーマに没入するのではなく、トレルチ思想の再検討を導く視点を探究することにあるのではないだろうか。それは、ある程度の距離を置き、俯瞰的に研究を進めることのできる／進めざるを得ない研究者が研究共同体の一員として最も貢献できる点であろう。そして、「トレルチ・ルネサンス」以降の研究の活況が成熟してきた現在は一層、トレルチの思想を全体として評価し直す契機となる議論が求められているように思う。私自身はこのような意識で研究に取り組んでおり、塩濱の大胆な問題設定には、志を同じくする仲間を得た思いであった。

このように巨大な課題に正面から取り組むことを目指すとしても、実際に議論を展開する際には、具体的な材料を足がかりにする必要がある。そこで、塩濱は本論文の第二の課題として「「歴史を歴史によって克服する」(Geschichte durch Geschichte überwinden) という印象的なフレーズの意味と《歴史主義》との関係を明解にすること」(1) を掲げる。「歴史を歴史によって克服する」とは、トレルチ晩年の主著『歴史主義とその諸問題』

の末尾近くに現れる表現である。したがって、第二の課題は具体的なテキスト解釈の問題となる。塩濱の見立てでは、「歴史を歴史によって克服する」という表現にはトレルチの歴史主義理解が込められており、この表現の解釈を通じてトレルチの歴史主義理解を解明することで、第一の課題、すなわちトレルチにとって歴史主義とはなんであったのかに迫ることができる。なお、ドイツ語の“Geschichte durch Geschichte überwinden”を「歴史を歴史によって克服する」と訳すことに塩濱の独自性が現れていることにも言及しておきたい。従来、この表現は「歴史によって歴史を克服する」と訳されており、私もこの訳し方を採用してきた。この二つの日本語の違いははたから見ると些細な違いであって、どちらでも同じことだと思われるかもしれない。しかし、このような読み替えの可能性に気づいたことが塩濱にとって重要な導きの糸になり、本論文の完成につながったという事実は尊重されるべきである。また、私自身を省みると、恥ずかしながらこのフレーズの訳出にはそれほど気を配っていなかったことを告白せざるを得ない。塩濱の提案する「歴史を歴史によって克服する」という訳文の方が、原文のドイツ語の語順に忠実であり、何によって歴史を克服するのかという手段に強調点がくる日本語になっていることを考えると、私としても従来の訳ではなく、「歴史を歴史によって克服する」という訳を支持したい。

以上のように、塩濱の問題設定には、これが有意義なものであると賛同できる。ただし、塩濱が「本論文において採用する思想解釈の方法は、トレルチの研究対象へのアプローチないし研究態度に準じている」(4)と述べるのは強弁であるとの批判を免れないだろう。塩濱も認めるように、トレルチは現実の歴史的世界の分析を行う「歴史学的方法」と、理念や価値を探究する「歴史哲学的方法」の緊張の中で思索を深めた。そのことを知る塩濱は「われわれもトレルチの「歴史学的方法」に準拠するだけでなく、彼の「歴史哲学的方法」にも

応分の配慮をしながら、この課題に取り組むこととする」(5) と述べるが、実際に塩濱が本論文で遂行するのは、冒頭の第一の課題で宣言されていたように、テクスト内在的な思想研究であり、もっぱら「歴史哲学的方法」に依拠するものである。私はテクスト内在的な研究の価値を否定したいわけではない。テクストの内在的な読解は、いつでも思想研究の中心である。だからこそ、塩濱は堂々と、「トレルチ自身の思考スタイルとは異なるが、自分はテクスト内在的な方法を採る」と宣言すべきではなかったか。本論文では、本来ならば塩濱自身のオリジナリティとして強調するべき内容が、強引にトレルチ自身の思索と合致したものであると主張されることで、議論の整合性や明確性が失われている箇所があり、序章においてすでに、その一端が現れている。

3.「歴史化」の再帰性について

序章で問題設定がなされた後、「第一章　トレルチによる《歴史主義》の定義と「歴史化」概念」において、本論文において中心的な考察対象となる《歴史主義》という概念と、「歴史化」という用語について整理が行われる。まず、ドイツを中心とした西洋近代思想における《歴史主義》の概念史が紹介された上で、トレルチの思想において《歴史主義》がどのような意味を持ってきたかが論じられる。その結果として、「歴史主義という言葉は、その悪しき側面的な意味から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されなければならない」(4) というトレルチの言葉を受けて、塩濱は「歴史化」(Historisierung) という言葉へと目を向け、この言葉の用例分析を行う。塩濱は「歴史化」およびその動詞形である「歴史化する」(historisieren)、そして「離脱」を意味する接頭辞“ent”のついた「脱歴史化」

(Enthistorisierung/enthistorisiert) の用例を洗い出す。トレルチにおいて特に名詞形の「歴史化」の用例は多岐にわたるが、その中から塩濱が特に注目するのは、人間の精神や思考が歴史化の主体であると同時に客体ともなっていることである。塩濱は次のように述べる。

> ここで注目すべきは、「歴史化を惹き起こす主体」は同時に「歴史化される対象」でもあるということである。つまり、われわれの思考や精神はある対象を「歴史化」する一方で、その作用によってみずからが「歴史化」されるという自己回帰的な性質をもつのである（25）

こうして、《歴史主義》の「自己回帰性」あるいは「再帰性」という、本論文における《歴史主義》理解の核心が取り出されてくる。

具体的な用例の分析から、「歴史化」および《歴史主義》の自己回帰性を指摘するこのような議論は明快であり、基本的には賛同できる。その上で、さらに考察を展開する可能性を提示したい。塩濱は、「歴史化」には主体と客体があるという前提で議論をしている。それは、“historisieren”という動詞が他動詞である以上は当然のことである。しかし、そのような前提で議論を進めることは、主体―客体の図式に「歴史化」のモチーフを押し込めることになってしまうのではないだろうか。塩濱の用例分析が示すように、「歴史化」は圧倒的に名詞形(Historisierung) で用いられており、動詞の場合でも受動態で使用され、主体―客体の構造が明示されないことが多いように見受けられる。これは、「歴史化」が他動詞的な用法にはなじまない、自動詞的あるいは中動態的な意味で用いられていることを意味するとは考えられないだろうか。すでに根本的な歴史化の中に生きる人

間やその思惟にとって、外部へのみ歴史化の作用をもたらす主体というものは想定し難い。その事態を塩濱は「再帰的」な構造であると指摘したが、もはや意志せざるとも「歴史化」していく他ない状態は、自動詞的あるいは中動態的なあり方として捉える方が適切なのではないだろうか(5)。

もう一点、第一章の議論に関する疑問を述べる。この章の結論部で塩濱は、《歴史主義》を「みずからの尾を噛むウロボロス」のようなものだと述べたマイネッケの言葉を引き、「おそらく類似した思想をトレルチも有していたと推察することができよう」(25)と記す。この箇所だけではなく、本論文ではマイネッケの言葉からトレルチの思想を推察する議論が散見される。確かに、この両者はベルリン大学の同僚として親しく議論を交わした仲であり、共に歴史主義の問題に取り組んだ盟友であった。しかし、二人の歴史主義理解には相当の差異もあることが知られている(6)。本論文の主題について、マイネッケとトレルチをどこまで重ねて理解すべきかは、もっと慎重に考察されるべきだったのではないか。

4. 歴史学的方法における「人格性」の意義

続く、「第二章 「歴史化」と歴史学的方法」では、われわれの思惟の「歴史化」の具体的な様相として、トレルチが歴史学的な思考方法についてどのように考えていたのかという分析、ならびに、「歴史化」と深い関連のある「個性」、「本質」、「形成」の概念がトレルチの思想において持つ意味の考察がなされる。ここでは、塩濱の議論の特色が現れており、そしてそれゆえに、さらなる議論の展開を期待したくなる、歴史学的な思考方法についての分析を紹介したい。

この分析において主たる一次資料となっているトレルチの論文のタイトルが、「神学における歴史学的方法と教義学的方法」であることにすでに表現されていることだが、ここでいう「歴史学的方法」とは「教義学的方法」と対置される思考方法である。「教義学的方法」が、特定の出来事―例えば、イエスの言動―を歴史の文脈から切り離して特権的な地位を与えるのとは異なり、「歴史学的方法」はあらゆる対象に「批判」、「類推」、「相関関係」の三つの原理を適用しなくてはならないというのがトレルチの主張である。トレルチの歴史学的方法について議論する際には、トレルチ自身がそう述べていることもあり、以上三つの原理について解説することで事足れりとすることが多い。それに対して塩濱は、コールスやシュトゥールマハーの議論を参照しながら、隠された「第四の思考原理」として「人格性と主観性」(Persönlichkeit und Subjektivität) の公理、あるいは「宗教的人格性」(die religiöse Persönlichkeit) の原則の重要性を指摘する。塩濱が「トレルチにおける「歴史学的方法」は決して信仰を排除するものではなく、むしろプロテスタントの信仰に淵源する「人格性と主観性」の公理によって、超越的・形而上学的次元に開かれている」(32) と述べるとおり、「人格性」と「主観性」(私としては、歴史の形成に参与する意志と責任という意味が込められていると考えるので、Subjektivität の訳語としては「主体性」の方が適切であると思うが、本稿では塩濱の訳語を尊重する) の意義に注目することで、「歴史学的方法」の議論を「歴史哲学」の議論へと接合することが可能になる。この文脈で「人格性」と「主観性」の意義を強調したことは慧眼であると言える。

重要な指摘であればこそ、「人格性」についての議論が、歴史的方法が「超越的・形而上学的次元」へと開かれることや、歴史的現象に対する信仰による解釈の可能性の提示に留まってしまったのは残念であった。「原理」、「公理」、「原則」などの用語が未整理で混乱を招くということはさておき、「人格性」はトレルチの思想において

非常に重要な概念であり、もっと深い論及があれば、本論文の説得力がさらに増したはずであるとの想いは、無い物ねだりではないはずである。まず先行研究について述べると、塩濱はコールスとシュトゥールマハーの二人の研究を参照しているが、ともに１９８０年代の論文であり、トレルチにおける「人格性」の問題については、もっと新しい研究成果にも目を配るべきではなかったか。例えば、ヒュービンガーやフォークトの論考[7]はトレルチの歴史記述における「人格性」の意義を論じており、塩濱の関心からすると、何らかの言及があってしかるべき先行研究であると思われる。

さらに大事なのは議論の掘り下げが不十分であることだが、いくつかの方向に議論を展開可能であったと思われる。例えば、塩濱では単純に並置されていた「人格性」と「主観性」のそれぞれがどのような概念なのか、そして両者がどのような関係にあるのかを考察することである。トレルチの歴史哲学を考察するために重要な論文である「キリスト教の絶対性と宗教史」[8]ではこの二つの概念が明確に区別されている。私の理解では、「主観性」は歴史現象に価値を見出す人間理性のアプリオリな構造の問題であり、「人格性」とはその構造のキリスト教的＝ヨーロッパ的実現形態である。前者についての考察をさらに進めれば、有限な人間理性が、どのようにして「超越的・形而上学的次元」に開かれることができるのか、という宗教の認識論あるいは宗教的アプリオリの問題へと繋がっていくだろう。後者についての考察は、「人格性」という概念自体が帯びる歴史性への反省を促す。「人格性」は歴史的思考の原理であるが、それ自体がヨーロッパの歴史の中で育まれた概念であると同時に、それは近代化において危機にさらされているため、歴史的思考によってトレルチが救出しようとする対象でもある[9]。すなわち、歴史的方法とは、「人格性」によって「人格性」を救い出そうとする試みという面を持っており、ここにも再帰性が認められる。歴史主義の再帰性に注目する塩濱が、歴史の中に生きる主体を「人

格性」と見なすことで生じる再帰的な構造について、さらに詳細な研究を進めることを期待したい。

5.「歴史を歴史によって克服する」の解釈を巡って

第三章と第四章では、トレルチが「歴史主義」の問題に取り組んだ未完の大著『歴史主義とその諸問題』が扱われる。「第三章　「歴史主義の危機」への対処としての歴史哲学の構想／構築」は、第四章で本格的に考察を加えるための準備に当てられていると言って良い。「歴史主義の危機」、「ヨーロッパ主義の普遍史」、「現在的文化総合」といった、『歴史主義とその諸問題』におけるキーワードの意味が解説された上で、「「普遍史」と「現在的文化総合」の循環関係」が指摘される。この循環関係の強調は、《歴史主義》の帯びる再帰性に注目する塩濱の議論において重要な箇所なので引用しておきたい。

> 「普遍史」と「現在的文化総合」は常に循環し、絶えず「歴史」を新たにしていく。つまり、こうして「歴史」は新たな「歴史」によって更新され、克服されていく。これは永遠の課題であり、歴史が閉じられない限り、最終的な真理にはたどりつけない。(55)

歴史的な存在者は、様々な歴史的要素の積み重ねの上に生成しており、その歴史的要素は様々な程度で他の歴史的存在者と共有されている。したがって、それぞれの歴史的存在者の視点から歴史を見ると、各自の視点の拘束性に常に囚われながらも、何らかの普遍性を持った歴史が見えてくる。トレルチにとっては、その普遍

性の範囲が「ヨーロッパ」であり、その範囲で描ける歴史が「ヨーロッパ主義の普遍史」である。一方、現在の社会において重要な共有されるべき規範を構築することが「現在的文化総合」である。トレルチはこの二つの課題が循環関係にあると述べており、塩濱はその構造を、次に見るトレルチの表現を先取りしながら、「「歴史」は新たな「歴史」によって更新され、克服されていく」と表現するのである。それでは、歴史が歴史によって克服されるとき、克服される歴史と克服する歴史には何が起きているのだろうか。その考察が第四章の課題となる。

「第四章　「歴史を歴史によって克服する」」において、これまでの《歴史主義》に関わる諸概念の考察や『歴史主義とその諸問題』の議論の整理に基づき、「歴史を歴史によって克服する」というフレーズの意味の解釈、そこから導かれる《歴史主義》と「歴史化」概念の再検討、さらに「脱歴史化」というモチーフの可能性の発見という濃密な議論が展開される。まず、「歴史を歴史によって克服する」というフレーズの解釈について見ていきたい。塩濱は、従来はスタンダードな解釈だった、このフレーズが「歴史主義の克服」を意味するという見解を退け、『歴史主義とその諸問題』の第４章という具体的な文脈に置くことでこのフレーズの意味は理解可能であるというＴ・レントルフの解釈と、レントルフに依拠しながら、その文脈をより具体的に特定した私の解釈を、基本的な方向性においては支持する。しかし、塩濱は、レントルフと私が具体的なテクスト解釈からこのフレーズの意味を探求しようとすることの不十分さを指摘する。

トレルチの《歴史主義》および「歴史を歴史によって克服する」という言葉の内奥に到達するためには、直近の文脈のみから解釈しようとする試みには肯首できない部分がある・・・なぜ歴史は克服されねばな

らないのか、歴史を克服する手段としての歴史は何を意味するのか、そして、克服するとはいかなる意味なのかが判然としないからである。この言葉のもつ意味を真に究明しようとするならば、直近の文脈からの解釈に加えて、トレルチの思想全体において解釈する必要があるだろう。(65)

これは非常に手厳しい批判であり、塩濱が「判然としない」と指摘する三つの疑問に答えられていないのならば、このフレーズを解釈したことにはならないだろう。そして確かに、改めて拙論を読み返すと、これらの問いに端的に答えている文章はなかった。その意味で、拙論が結論において明確さを欠いているとの批判は甘んじて受け入れるほかない。しかし、例えば以下の文章は、トレルチ思想の研究史という具体例を通して、塩濱が求めている回答の全てに答えようとするものであったと弁明したい。

歴史を歴史によって克服し、未来へと向けた形成のために土台を築くことの意義は、思想史においても示されるのである。トレルチの思想から形成への意思を取り出し、そこから解釈者の思想を展開することは批判されるべきことではなく、それはすでにトレルチ思想の解釈史の一部を成している。しかし今後の解釈者がこれまでのトレルチ解釈を無批判に受け入れトレルチ自身の思想と混同すると、その思想は歪められることになる。そこで、トレルチが自らのテクストに込めた意図を、テクストそれ自体と向き合うこと、あるいは当時の歴史的・思想史的文脈に置いて理解し直す必要が繰り返し生じることになる。その作業を通して、現代的問題へとトレルチの思想を適用することが可能となる土台を準備すること、それが思想史研究の一つの意義であるだろう(10)。

ここから一般的な表現として塩濱への回答を述べると、過去の歴史解釈はその解釈がなされた時の関心に基づいたものであるから繰り返し克服されねばならず、その都度の現在において可能なかぎりの視野の広さと公正さで歴史的思考を行うことが克服の手段であり、そのような手続きによって手垢のついた歴史像を刷新することが克服の意味するところとなる。以下で見るように、この回答は塩濱が提示する解釈とは異なっている。塩濱の指摘をきっかけに、ここで私の解釈を明確化できたことに感謝しつつ、今後ここからさらなる討議ができることを望んでいる。

塩濱からの批判にもう一点応答しておきたい。塩濱は私がトレルチの《歴史主義》および「歴史を歴史によって克服する」という言葉を、「直近の文脈のみから解釈」していると述べるが、これは誤解である。確かに、塩濱が引用している拙論「未来へと向かうための歴史的思考」は、トレルチの言葉を『歴史主義とその諸問題』第四章という具体的な文脈において考察している。しかし、この拙論は『トレルチにおける歴史と共同体』という書籍（およびその元となった博士論文）の一部であり、拙著の全体は、塩濱の博士論文と同程度には―すなわち、１８９０年代から晩年まで―トレルチの思索全体を視野に入れ、彼の考える「歴史的思考」の意味を探究することを課題としている。「トレルチの研究対象の変化はしばしば思想上の転換として捉えられることがあるが、実際にはそれは根本的な思想の変化を意味するのではなく、時期ごとにフォーカスされる対象が移行するだけ」(66) だと述べる塩濱は、同様の見解を拙著の「終章」における「本書が主題とした歴史的思考の内容について言えば、そこに大きな変化はない。・・・しかし、どの点に強調点を置いてトレルチが議論を展開するかは、周囲の状況やそれ対するトレルチの診断によって異なってくる」[11] という結論に見いだすことができるはずである。トレルチの書き残したフレーズが具体的なテクストの中で固有の意味を持ちつつ彼の思想の全

体の中でもその意味が考察されうるように、私の主張も一つの章の中で一定の意味を持ちつつ拙著全体のコンテクストの中での意味を持っている。

6.「脱歴史化」モチーフの射程

さて、ともかくも「歴史を歴史によって克服する」というフレーズと《歴史主義》を広い視野から捉えようとする塩濱は、このフレーズをどう解釈するのだろうか。ここで塩濱が注目するのが、第一章で用例を分析した「歴史化」という概念が持つ再帰性と、その関連で用例が指摘されていた「脱歴史化」のモチーフである。塩濱は、トレルチが『信仰論』でイエスについて「彼とともに、彼の周りに集まっている全歴史も脱歴史化される」[12]と述べている箇所から、次のように「脱歴史化」の意味を取り出す。

> 歴史が「脱歴史化」されることによって、永遠が歴史的なもののなかに入ってくる。そして、歴史が「脱歴史化」されるとは、「歴史的なものを脱ぎ捨てる」ことを意味する。この「脱歴史化」こそが、ある意味で、歴史を歴史によって克服する一つの手段となるのである。(68)

こうして―「一つの」という留保は置かれているが―「脱歴史化」が歴史を克服する手段であるとの主張がなされる。そして、「歴史化」と「脱歴史化」の関係については次のように主張される。

したがって、「歴史化」には二つの次元のことがらを読み取ることができよう。一つは、時間的・空間的な意味でその起源へと遡る「歴史化」であり、もう一つは、活性化された理念や価値が「歴史を超えた原理」として分離化・自立化・精神化するプロセスである。この二つの次元の事柄が、再帰的に、また循環的に生じるというところに、トレルチの「歴史化」概念の特徴が表れている。《歴史主義》を「歴史化」概念によって捉えることが正当だとするならば、同様の構造が《歴史主義》そのものにもみられるといえるだろう。ところで、過去へと起源を遡る「歴史学化」に対する反転の局面としての「歴史化」は、つまり先に示した、トレルチが「脱歴史化」(Enthistorisierung) と呼ぶ契機にまさに相当するといえる。トレルチの「歴史化」概念は、「歴史学化」と「脱歴史化」の循環性と再帰性とを併せもつ概念なのである。(70)

塩濱は「歴史化」の概念の中に含まれる二つの契機を、歴史の中へと具体的な起源となる現象を求める営みとしての「歴史学化」と、歴史的な現象から、その現象が置かれた歴史的文脈を超えた原理や価値が立ち現れてくる契機としての「脱歴史化」として整理する。「脱歴史化」は原理や価値が有限な歴史を抜け出す事態を指しているが、「脱歴史化」のモチーフの出発点に置かれていたように「永遠が歴史的なもののなかに入ってくる」ことでもあり、それはキリスト教の用語を用いるならば、「啓示」の出来事である。本論文の「終章」の最後の一文には、「歴史による克服」が単なる人間的な営為ではないという塩濱の認識が明確に示されている。

トレルチはあえて、「歴史を歴史によって克服する」と表現した。ここには、その克服する主体としてのわれわれ人間と同時に、歴史のなかに一種の神的なものが啓示されてくることをも意味しているのかもし

れない。(78)

神が歴史の経過を通じて世界に関わることは、トレルチの神理解の重要な点であり、塩濱の解釈は説得力のあるものであると言える。ここで塩濱が試みたような、トレルチの《歴史主義》を彼の『信仰論』との有機的な関連において解釈する研究はこれまであまりなされていない。私自身も同様の問題に取り組んでいながら、『信仰論』への目配りが全く不十分であったことを塩濱の論文から教えられた。さらに、『信仰論』の中に現れる「脱歴史化」という言葉をトレルチの《歴史主義》を理解するモチーフとして用いた研究は管見の限り存在しない。ここに本論文の最大の独自性がある。そして、単に独自の新しい試みであるだけではなく、トレルチの《歴史主義》と『信仰論』の関連を明確にするという重要な結果をもたらしている。

以上のように、塩濱による「脱歴史化」モチーフの発見の意義を高く評価した上で、このモチーフを取り出してくる際の理路は危ういものであることを指摘しておきたい。そのために、『信仰論』において「脱歴史化」という言葉が用いられている箇所をもう一度、今度は塩濱が引用している通りにこの箇所の全体を確認したい。やや長いが次の通りである。

それにもかかわらず、歴史的なものを信仰論の中に含めることに対して持ち上がる困難は、隠蔽されるべきでない。とりわけ信仰の自律という思想からなされる意義がその権利を主張する。なまくらな事実的なものとの対比において理念的であるところのもの、自由の王国に由来するところのもの、現存在の確信において到達できるものである。ところで、このような確信は、権威に基づいて形成されるのではな

く、人格性の内的必然性から形成されるものである。しかし、カントがその頭目であるところの、まさにこのような観念論的な思想からすれば、外的な確信によって何かを獲得することは不可能となる。神に対する肯定は、生き生きとした人格的な契機から生まれるときにのみ意味をもつ。それ以外のすべてのことは、単に真なるものであるとの是認にすぎない。かくして、歴史は確信の対象とはなり得ない。なぜなら、それは事物の普遍的な因果連関の一部以外の何ものでもないからである。だが、信仰はもっぱら時間を超越したものに属するものに向けられており、したがって、歴史的なものを脱ぎ捨てなければならない。なぜなら、時間を超越したものとは、直接的に現在的なものだからである。ひとは頭を後ろ向きにしながら信じることはできない。ひとは現在的なものと、時間を超越したものとに関してのみ、信じることができるのであって、幾千もの媒介物によって伝承された過去的なものに関しては、信じることはできない。ひとは未来に関して、また不死性に関して、信じることができる。だが、われわれが後ろ向きになるやいなや、すべてのものは苦痛に満ちた外観を呈する。イエスが神的なものの可視化にほかならず、本来的な意味での歴史的人物ではないとすれば、その場合、彼は時間を超越しており、父〔なる神〕と等しいことになる。信仰はその対象を容易にイエスにおいて見いだすことができる。イエスは、あらゆる瞬間に、王として現在的であり、あらゆる祈りを聞き分ける。そして、彼とともに、彼の周りに集まっている全歴史も脱歴史化される。永遠が歴史的制約の中に入ってくる。そして歴史に対する信仰において、永遠を捕捉することが可能となる。しかし、われわれがイエスと教会の創立とを歴史に押し戻せば、それらは〔歴史の〕全連関の中に引き込まれ、神的現実としてのそれらの存在は解消され、そして歴史的客体としては、もはや本来的意味での信仰の対象たり得なくなる。さもなくば、われわれは自分たちの信仰を、永遠的なもの

にではなく、時間的なもの、有限なものに向けることになるであろう[13]。

引用文の全体の主題は、歴史と信仰の緊張関係である。傍線部では、イエスの出来事を歴史の流れから切り離せば歴史と信仰は調停可能だと述べられ、波線部ではイエスや初代教会も歴史上の出来事だと考えると、信仰はその対象を失ってしまうという困難さが示される。傍線部と波線部のどちらがトレルチの立場なのだろうか、あるいは少なくとも、トレルチの立場に近いものなのだろうか。それは後者であろう。トレルチは歴史学的方法を徹底的に適用することを主張し、それによってもたらされるキリスト教の絶対性や信仰を保持することの困難さと向き合った。それに対し、傍線部の発想は、歴史の一部を歴史学的方法から隔離し、信仰の保障とする、トレルチが批判した教義学的方法だろう。そのような安易な解決策を、トレルチは拒否していた。

したがって、「脱歴史化」という言葉は、否定されるべき内容を説明する文中に現れるということになる。提示されている材料からは、トレルチ自身が「脱歴史化」という言葉に積極的な意味を込めて語っていたと主張することには無理があるように思える。「脱歴史化」とは、トレルチが図らずも使用した言葉から、トレルチ自身の意図を超えて、彼の《歴史主義》の構造を理解するために有効なモチーフとして塩濱が見出したものであると言えるだろう。

トレルチのテクストからトレルチの意図を超えて塩濱が見出した「脱歴史化」のモチーフは、トレルチの思想研究を超えた射程を持つように思える。例えば、キリスト教神学に関して言うと、「脱歴史化」における神の啓示という歴史理解は、K. バルトとトレルチの間のいわゆる「断絶における連続」を再検討することにも繋がるだろうし、P. ティリッヒの「カイロス」の議論との連続性の考察を進めることもできるだろう。また、

神と人間の関係や歴史の意味を問うたモルトマンやパネンベルクらさらに次の世代の神学者たちの思想についても、「脱歴史化」のモチーフは有効な視角を提供しうるのではないだろうか。さらに、歴史を歴史によって克服する神というイメージは、かねてより指摘はあったものの[14]、本格的に取り組んだ研究のない、トレルチとプロセス神学の比較研究の手がかりとなる可能性も秘めている。塩濱が「歴史化」という概念の地道な用例分析から掴み取った「脱歴史化」という原石は、その輝きの一端は伺えるものの、まだその全貌は明らかではない。ぜひ、今後一層磨きをかけて、キリスト教思想史研究に新たな光をもたらしてもらいたい。

（こやなぎ　あつし・北海学園大学人文学部准教授）

[註]

（1）以下、本論文からの引用については、本文中で丸括弧中に引用元ページ数のみを記す。

（2）エルンスト・トレルチ（Ernst Troeltsch）は１８６５年２月17日に生まれ、１９２３年２月１日に57歳で亡くなった。なお、拙著にトレルチの享年が58歳とあるのは間違いである。（小柳敦史『トレルチにおける歴史と共同体』知泉書館、２０１５年、４頁。）

（3）近藤勝彦『トレルチ研究』（上）教文館、１９９６年、７頁。

（4）Ernst Troeltsch, *Der Historismus und seine Probleme (1922). Kritische Gesamtausgabe Bd. 16*, (Hg. Von Friedrich Wilhelm Graf in Zusammenarbeit mit Matthias Schoßberger), Walter de Gruyter, 2008, S. 281.（塩濱の博士論文では20頁に引用されている。）

（5）H．ホワイトはR．バルトとJ．デリダに依拠しながら歴史を「書く」ことを中動態として理解する可能性を指摘する。（ヘイドン・ホワイト『歴史の喩法』上村忠男訳、作品社、２０１７年、２２５―２２７頁。）ただし、國分功一郎はホワイトの中動態解釈には否定的である。（國分功一郎『中動態の世界　意志と責任の考古学』医学書院、２０１７年、３１６―３１７頁。）

（6）例えば、安酸敏眞はトレルチとマイネッケの歴史主義理解をはっきりと区別しなくてはならないと主張する。その理由については以下を参照：安酸敏眞「トレルチと「歴史主義」の問題（承前）―概念史的・問題史的考察の試み」、『年報　新人文学』第参号、２００６年、65―75頁。

（7）Gangolf Hübinger, Troeltschs Heidelberger Historik, in: Wolfgang Schluchter/ Friedrich Wilhelm Graf (Hg.), *Asketischer Protestantismus und der ›Geist‹ des modernen Kapitalismus. Max Weber und Ernst Troeltsch*, Mohr Siebeck, 2005, S. 185-200; Friedemann Voigt, Die Idee der Persönlichkeit. Ernst Troeltsch und die »Einheit der Religionsgeschichte«, in: Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft 97Jg., 2013, S. 27-37.

（8）Ernst Troeltsch, *Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschichte (1902/1912). Kritische Gesamtausgabe Bd. 5*, de Gruyter, 1998.（エルンスト・トレルチ「キリスト教の絶対性と宗教史」『現代キリスト教思想叢書』第２巻、高野晃兆訳、白水社、１９７４年、７―１６０頁。）

（9）トレルチを含む、いわゆる自由主義神学者たちにとっての「人格性」の問題については以下の文献を参照：F. W. Graf, Rettung der Persönlichkeit, in: R. v. Bruch, F. W. Graf und G. Hübinger (Hg.) , *Kultur und Kulturwissenschaften um 1900*, Franz Steiner Verlag, 1989, S. 103-132.

（10）『トレルチにおける歴史と共同体』２１０頁。

（11）同書２１７頁。

（12）エルンスト・トレルチ『信仰論』安酸敏眞訳、教文館、１９９７年、99頁。

（13）同書、99―１００頁。

（14）グラーフとルッディースはトレルチをホワイトヘッドと比較する可能性を指摘する。(Friedrich Wilhelm Graf und Hartmut Ruddies, Ernst Troeltsch: Geschichtsphilosophie in praktischer Absicht, in: Josef Speck (Hg.), Grundprobleme der großen Philosophen. Philosophie der Neuzeit IV, Vandenhoeck & Ruprecht, 1986, S. 149.) また、水垣渉はトレルチの神論について「プロセス神学に通ずる面も見受けられる」と述べる。(水垣渉「「神の自己二重化」について」、古屋安雄編『中川秀恭先生八十五歳記念論文集　なぜキリスト教か』創文社、１４４頁。)